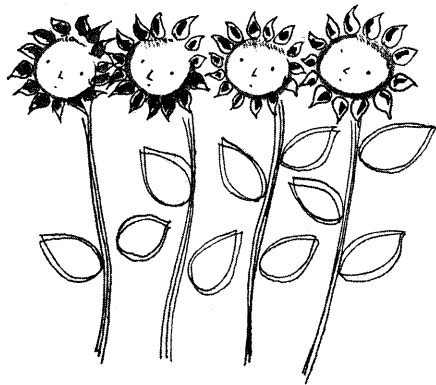


ふくろうのつぶやき

—小さな場所に意味がある—

真壁 伍郎

毎年、春になるとつらい別れをしなければならぬ子どもたちが何人かいます。子どもたちは中学生になると、いちおうわたしたちの文庫も卒業することになっていきます。



「お世話になりました」などと、めっきり大人びた言葉を使って、子どもたちは挨拶してゆきます。幼稚園のころから来ていた子どもが、もうこんなに大きくなったのかと、改めて時の流れの速さを感じさせられます。

「また、たまに顔を見せてね」と声をかけ、うしろ姿を見送りながら、この子の人生が豊かなものであるようにと、ひそかに祈ります。

子どもには 多彩な人生が

泉となって ひそんでいる

まだ もやと霧に

包まれてはいるが

子どもは ひとつのつぼみ

そこに 木ぜんたいが

また 花そのものが

おおわれた姿で 咲いている

(J・G・ヘルダー)

まだ見えぬその子の将来の姿を予感しながら一人ひとりの子どもとかかわることができる。養育や教育に携わる親や教師の特権はそれだろうと思います。しかも、その子の人生の源となる泉やつぼみはすでにそこにある。いや、すでに形をとり、花咲いているのだとこの詩はいます。ヘルダーのこの言葉は、哲学者、森有正の言葉をはからずも思わせてくれます。

「二つの生涯というものは、その過程を営む、生命の稚い日に、すでに、その本質において、残るところなく、露われているのではないだろうか。僕は現在を反省し、また幼年時代を回顧するとき、そう信ぜざるをえない。この確からしい事柄は、悲痛であると同時に、限りなく慰めに充ちている」(バビロンの流れのほとりにて)。

去って行く子を見送りながら、この子どものいた場所に、こんどはだれが座を占めるようになるのだろうか

ふと思います。そして、その子がいつもいた場所の意味を考えてしまいます。それぞれの子どもがいた場所と、泉やつぼみがあるきまった場所にひっそりとおさまっている情景を重ねあわせてしまいます。

文庫では、不思議なことに、どの子どもだいたいきまった場所にいました。ですから、あとで、かつて文庫に来ていた子どもたちのことを思いだそうとすると、たいいてい、どの辺にどの子がいたかが見えてきます。なにも席をきめていたわけではありません。それぞれがめいめい好きな場所に陣どっただけです。それでいて、なんとなく居場所が定まっているのです。

体が小さいくせに、いつも後の隅っこにいるちひろさんは、もう三年生です。このあたりで、ちょっと別の場所に移ったらと誘いをかけても、ぜんぜん応じてくれません。

「だって、ぼく目がいいもん」

聞いてみれば、視力は一・五。どうしても彼女（たしかにこの子は女の子、でもいつもぼくといいます）を動

かすすべはありません。

大きい子が小さい子の前に座ったり、大きい子どうしがすみっこに寄り集まったりで、まるで秩序もなにもあったものではありません。せめて、卒業する子が出ていった学年初めくらいは、それぞれの居場所の整理をしてやりたいような気持ちにもなります。

こんなある日、ふくろうがつぶやいていました。

「ほっておけ、ほっておけ。それぞれが気に入った場所だ。子どもが好きな小さな場所には意味がある」

たしかに、ふくろうに言われるまでもなく、そのとおりです。わたしたちにはそれぞれ好きな居場所があります。日当りの良い場所が好きな人もいれば、人目につかないちょっと陰になったところがいいという人もいます。広い、狭いの問題であるよりも、落ち着いたほっとできるような場所が欲しいのです。人それぞれに幸せを感じる場所があるのでしょ。

そこにいれば、安全だし、好きなことを自由に思う

かべて楽しめる。なにも文庫のおじさんのわたしのまんに陣どることが楽しみを増すというものでもありません。その点、教師は、とにかく子どもを前に出したがりまず、

「そんなところじゃ見えないでしょ」、「お話を聞くなり前がいいのに」などと。

ところが子どもたちは、大人以上に、自分の居場所に固執します。場所が変わると、落着けないし、だいたいお話に集中できないのかもしれない。

十畳くらいのところ三十名くらいの子どもたちがひしめきあうのですから、だれもが好きな場所というわけにはゆきません。わたしたちの文庫では、子どもたちはそれぞれ本をいれるかばんをもってくることになっています。本が雨に濡れたり、汚れたりしないためです。このかばんを子どもたちはよく自分の座りたい場所に置いておきます。お話が始まるまで、本を探したり、外で遊ぶ、その間の場所取りというわけです。そして、その「場」に、もうその子らしい個性が感じられたりしま

す。

四年生のけい子さんは、年中据えつけてあるストープの前がお気にいりです。そこでこのところきまって詩の本を開いて見えています。穏やかな顔で、じっと詩を読んでいるこの子を見ると、どんなすごい世界がこの子の心に広がっているかと、こちらまでときどきしてしまいます。口数の少ないけい子さんは、将来、エリザベス朝の、だんろのまえで読書する貴婦人のような面影をもつ人になることでしょう。

どうしてこうした、場所にたいする好みが出てくるのでしょうか。すでに家庭に置かれたその子の居場所が影響しているのかもしれない。アットホームとコンファタブル（快適さ）は親戚同士のように思います。そうすると、家にいる安らぎ、しかも家のなかで最も落着ける自分の居場所、これがわたしたちのお気にいりの場所の原型なのかもしれません。

近代的な家具をそろえたものの、なんとなく居心地がよくなくて、結局は、部屋の片隅になにか昔どりの居

場所を確保してはっとした、などというお笑いに似た話を聞きます。また、小学校に入るのだからせっかくふんばつして買ってやったのに、子どもは全然机に向おうとしないと愚痴る親たちの声もよく耳にします。これなど、自分の子どものころのことを思いだしてみれば、すぐにでも分りそうなことなのに、とつい思ってしまう。

快適さは道具だけではありません。むしろ道具の傍らに許された、狭いけど自由な空間。そこでの安らぎ、それにはあまり人目にさらされていないことが大切なようです。この点、出たがり、出しゃばることが時代の風潮のようになった現代が、なんとなく落着けないのは無理もありません。アットホームの意味を見失っているのです。

イギリス人が誇りにし、生涯思いかえず言葉が二つあるそうです。昔の話ですから、今は違うかもしれませんが、それはホーム（家庭）とマザー（母）です。もしそれが事実だとすれば、いくつになっても思いかえず安ら

ぎは、ホームだけではなく、マザーとも深くかかわっていることになりました。母のぬくもり、母のやさしさ、母のまなざしが注がれていること。これが子どもの落着きや安らぎに深い影響を与えるのでしよう。いやそれどころか、その影響はその人の生涯の最後にまで及ぶのだといえそうです。

わたしの子どものお気にいりの場所が、いまから考えると、あまりたいしたところでなかったことに驚いてしまいます。寝間で、寝ながら母から昔話を聞いたところとか、茶の間の片隅で姉や兄からいろいろ本を読んでもらったところなどがそうです。そして変なことにそうした場所のこととなると、折れた障子の棧や、ふすまの落書きにいたるまでよく覚えています。そればかりではありません。そのときの母の様子や兄弟たちがどこに、どんな風にして一緒にいたかまでが糸がたぐるようにどんどん思われます。これはきつとだれでもそうだろうと思います。

お話を聞き、空想に思いを馳せながら、実はどんなに

よくあたりの様子を目にいれ、心に受けとめていたかがわかります。これが不思議なところです。空想の目と物事を冷静に見る目は別なものだとわたしたちは信じています。しかし、どうもそうではないらしい。空想の働かない観察は、見た物事を心に止めることはないのです。

ですから、お気にいりの自分の小さな場所でこそ、わたしたちは思いを深め、想像の翼をはばたかせることができ、さらに物事の深い観察と認識ができるのだといえそうです。『おぼけリンゴ』を書いたドイツの絵本作家、ヤーノシュはそのことを見事に語ってくれています。

「子どもたちには、その目の高さにあったお気にいりの場所がある。そこにいると、おもしろい話や、楽しいことが次から次へと浮んでくる。部屋のきまつた片隅で、また、雨の降る窓ぎわで、子どもは際限もなく思いをくり広げる。子どもにとって、その場所は天国です。立派な部屋や机や椅子があっても、子どもにはどうでもよい

こと。要は、この片隅です。子どもはここではとても幸せです。

三歳のわたしにとってのお気にいりの場所は、あひる小屋の板壁のところでした。陽があたってはんのりと暖かくなった乾いた板の壁。地面も暖かくなって、あひるたちの匂いがたちこめています。この坂壁を背に座っていると、いろんなお話が浮んできます。小人や土の精が姿を現わします。立って七十センチ、座れば三十五センチにしかならないわたしにとって、地面に低く生きている小人たちは、本当の仲間でした。

九歳になると、ちょっと離れた木立ち、とくにその柳の木の上が、わたしのお気にいりの場所になりました。そこからは、空がぐんと開け、畑にいる牛や馬の姿がよく見えました。空を飛べたらどんなにいいかなあと思いました。そして、飛ぶときのことをいろいろ想像しました」。

ご存知のように、大きくなってヤーノシュは、その自

分だけが見てきた世界のことを絵本にしました。それが、『おぼけリンゴ』です。

よその人の木には、リンゴがいつぱいになっているのに、彼の木にだけは一つも実がなりません。質素ではあっても、お気にいりの自分のベッドにはいると、夢や願いが一挙にふくらんできます。そして、彼はそっと祈ります、

「ひとつでいいから、うちのきにもリンゴがなりますように。そんなにりっぱなみでなくてもいいのです。ひとつでいいからほしいのです」。

こうしてこの本では、小さな場所で、小さく願ったことが、大きな、とても大きな実りとなったことが物語られていきます。

そういえばわたしも、幼稚園のころ、広い遊戯室の片隅で、ストーブにあたっておられた先生の脚をみて、「でっけーあしらなー」と思ったことがあります。子ども目の目の高さにはそれがいちばん目にはいったのでしよう。薪ストーブの暖かさと、その先生の優しさが、その

脚をととても頼もしい、なつかしい大根に見せてくれたのでした。以来わたしは、幼稚園の先生にこだわりつけ、とうとう本物の幼稚園の先生と結婚してしまいました。幼いころの印象が人を支配！してしまふほんの一例です。ですから、わたしは今でも、妻にはこういい続けています、「子どもの目から見える脚には気をつけなさいよ」と。

小さなすみっこで子どもが見ている、そのものの意味を軽んじないようにしましょう。そこで得たイメージの深さ、強さは、生涯のどの時期よりも強烈で、あとまで残りつづけます。親や教師に暖かく守られた安らぎの経験は、いのちへの信頼となるでしょうし、そこではぐくまれた夢は、将来の希望となって育ちます。

小さなすみっこは、また、わたしたちが天や地の自然にふれる場所です。そして、それはそのまま神秘の世界への入口ともなってくれます。

幼稚園での出来事として妻が語ってくれた話をわたし

は忘れることができません。

いつもクラスのはみだしっ子で先生の手をやかしている隆一くんが、ある冬の日、雪の降りしきるなか、すべり台の上に寝ころんで空を見上げていました。担任の先生はそれを見て、あの子また変なことをしている。どうしたのだろうか、窓を開けて呼び寄せようと思いました。たまたまそこにいあわせた妻はそれを制していったそうです。

「まあ、ちょっとみてみましょう」

空の奥からわいてくるようにどんどん降ってくる雪を隆一くんは、あきもせずに見ていました。やがて自分がそんなところに長くいたのに気がついたのでしょうか、彼は雪まみれになって園の中にもどってきました。

「隆一くん、雪が降ってるのを見ていたみたいだね」と妻が声をかけると、彼はにっこり笑って、「うん、気持ちよかった」と答えたそうです。

これを聞いて、わたしはすっかり嬉しくなっていました。落着きがなく、いつもみんなに要注意とばかり

見られていた隆一くんのこの日の体験は、彼の心に深く刻まれたことでしょう。先生が妨げずに、そっと見てあげていたのもよかったと思います。

天の高みから降ってくる雪のひとひら、ひとひらに、彼は生きた自然を感じ、畏れを予感していたにちがいません。

詩人の八木重吉も似たような経験をうたっています。

かんがえてみると

きょうのいちばんよかったことは

もさもさとした

けやきの

ひよろながい梢をみていたことだった

ひとり静まった所、小さな小さな片隅、そこでこそ、わたしたちは自然の不思議な力に出会い、異なる世界へと導かれてゆきます。子どもの心を引きつけるすぐれた文学の多くが、こうした小さな場所を起点にして物語が

始まっているのは決して偶然ではありません。ある者は、ころころころがって穴のなかに入り、そこに不思議な世界を発見します。ある者は、ふと見つけた洋服ダンスが異なる世界の入口となります。「狭き門より入れ」は、競争率の高い幼稚園や大学へ入ることではありません。片隅の、こんなものかと思えるささいな門を通らなければ、天国は見えない、人間を超えた力に出会うことはできないということでしょう。

こうしてみると小さな存在である子どもにも焦点をあて、「あなたがたは、この幼な子のようにならなければ」と語ったイエスの言葉には、とても深い真理がこめられていたのだと思います。

文字通り小さな存在でしかない子どもたちは、背が低く、大地にいちばん目を注いでいます。また、見あげる空が本当に高いことを知っています。こうした自然への近さ、親しさが、彼らに土や水にたいする興味を引き起こすでしょう。子どもたちはとにかく、土や水をいじりたがります。文庫へ来てても、なにやかやと外へ出て、

石や草や虫を見つけ、水道の水を出したりして遊んでいます。どうも彼らは、昔の人々が、すべてのものの元素だと考えた、火や風や土や水のひとつひとつに、いいしれない魅力を感じているようです。人類の原体験が、子どもにはまだそのまま渦まいているのかもしれない。

最近では精神療法の一つに、こうした土をいじり、草花を育てることが取入れられていると聞きます。それがとても効果があるというのです。地面からちよつとも高く大きくなろうとする努力を強いられる現代人は、ある意味で、高みに登って全体を見下ろしたいという「高度病」にかかっているといえます。ですから、低いところで、しかも小さな場所で、正直に自然とつきあってみることが、この病氣の一番の治療になるのではないかと思います。その先生になる人が、子どもたちです。

幼い子の文学の大きな特徴の一つは、「行きて帰りました」物語だといえます。主人公は、冒険や旅に出てゆきまします。しかし、かならず元の場所に、めでたし、めでたし

と帰ってきます。帰ってくるために出てゆくとさえいえ
そうです。それなら、なぜ出てゆくのか。出ていったと
きと帰ってきたときのその間に、主人公の成長がありま
す。元の古巣をなつかしく見る目と心が育っています。

子どもたちは、好きな物語を読んだり聞いたりしなが
ら、今いる片隅の意味を味わっているのかもしれない
ん。そこをどどん掘り下げてゆくのも彼らの仕事でし
ょうし、そこを起点に空へと飛ぶのも彼らの自由です。
でも、あの小さな片隅が自分のエネルギーの源だっ
た、いつかはつきりと悟ることでしょう。

わたしたちの人生の原像は、幼い日にすでに現れてい
た。これは決して宿命論ではありません。むしろ、森有
正がいうように、非常に深い、慰めにみちた消息ではな
いかと思います。そうした子どもたちとともに居あわせ
るわたしたちです。小さな片隅にこだわる子どもたちか
ら、むしろそこになにかがあるのかを学ぼうではありませんか。

わたしは、こんなことを考えさせてくれたふくろうに
今度もまた、深く感謝しましょう。

(新潟医療短大)